

観光における虚構性の研究

観光社会学の視点で捉えた
「旅の疑似体験」

小川 功

Isao Ogawa

跡見学園女子大学 / 教授

滋賀大学 / 名誉教授

I

はじめに

——観光における真正性と虚偽性

本誌『彦根論叢』の名称に則しているなら、彦根城は取り壊しを奇跡的に免れた正真正銘の真正の古城であって、近年にいたりコンクリート製なんぞの安普請で再建したようなニセモノ・模造品ではないことを彦根市民は大変誇りとしている。観光の世界でよく目にするのは、築城以来何百年を経た本物のお城と、ニセモノの「模造」城の対比である。築城400年祭にあわせて国宝彦根城の抜本的な補修工事が平成8年12月に完成し覆いが外された時、市民は黄金眩いその余りの華麗な姿に驚愕した。おそらく文化庁のご指示で400年前の築城当時の姿¹⁾に忠実に戻した結果と考えられる。天守・附櫓および多聞櫓の屋根の葺き替えと壁や漆の塗り替え、木材の腐食部分補修、唐破風飾金具の金箔押し直しが行われた結果、彦根城は創建当初のオリジナルな姿に戻されて、補修工事後にこの華麗な山吹色の彦根城を初めて見学する遠方からの観光客は、築城400年祭にあわせて登場した井伊家お召しの飼い猫「ひこにゃん」ともども大満足した。

しかし、これまでずっと薄汚れた古色蒼然たる彦根城を日夜仰ぎ見てきた彦根市民は当局から400年間の経年の痛みや汚れを補修し、その後の加工を排除したものとの説明を受け、「天守の34種類約6万枚にも及ぶ屋根瓦の吹き替えと白壁の塗り替えが中心に行われ、現代に美しく蘇っ²⁾た華麗なお城の出現になにか割り切れぬものを感

1) 日本の歴史的建造物の修理改造では創建当初の姿が最も美しいものとの大前提のもとに画一的に創建当初の形に復原する方針をとっている。国宝彦根城の史跡に敷地の一部が指定されていた滋賀大学でも既存の学生関連施設の建替えが一切出来ず苦慮していた。

2) 「彦根城のご案内」公益社団法人彦根観光協会 www.hikoneshi.com/jp/castle (平成27年1月7日検索)

3) 通称ヴェニス憲章。彦根城の事例で前者は文化庁の考える真正性に則した大改修の結果であり、後者はユネスコの真

じたはずである。いわく「こんなキラキラ光る金亀城はまるで再建されたヨソの安物の城のようだ」と。何もしらぬ一見の素人観光客の受けはすこぶるよいのだが、玄人筋の受けは「？」かと当時一観光客のまなざしでなく、彦根城の一角に勤務していた筆者には感じられた。果たして「観光用につくりあげられた」黄金燦然たる金亀城と、補修前の古色蒼然たる旧彦根城と、一体どちらが本物の彦根城なのか、観光客が満足すればよいのか、住民の受け取り方こそが大切なのか、果たして何が観光における真正性かという難問が本稿の主たる課題である。

世界遺産に登録するために求められる条件として、世界遺産の価値を構成する必要な要素がすべて含まれるという「完全性」とともに、文化遺産を構成する素材やデザイン、用途、機能などが本物で、関連した伝統や技能、精神、感性が正しく伝えられている「真正性 (Authenticity)」という遺産登録基準を満たさなければならない。1965年イコモスで採択された「記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章」³⁾には修復の際に「オリジナルな材料と確実な資料を尊重する」ことが明記されていた。このため日本では1992年の世界遺産条約批准が「真正性」とは何かを問う論議を生む契機となった。その代表的な場が1994年に奈良で開催の「世界遺産国際会議」であり、当時の世界遺産は概してヨーロッパに集中しキリスト教関連遺産が多い背景として石造り建造物を前提に「素材の真正性」などを要求する世界遺産条約が西洋中心主義の考えを色濃く反映しているためなどと

批判された⁴⁾。そうした一連の文脈からは厳格な「真正性」論の根底には西欧キリスト教文化のイデオロギー、とりわけ真正なる唯一絶対神を崇め、他を邪教として排斥する一神教的教義の影響を色濃く感じ取れるように筆者には思われる。

それ以前からも観光学分野、とりわけ観光社会学研究では、1962年Boorstinが観光客は観光客目当てに人為的に作られ、真正性の欠落した「疑似イベント (Pseudo-event)」を見ているにすぎないと指摘⁵⁾して以降、多くの真正性の議論が展開された。すなわち観光客が観光地で人為的に作られたものではなく、真正なものに接したい、体験したいというモチベーションとして真正性 (Authenticity) なる概念が主要な課題とされて Trilling (1972) と MacCannell, Dean (1973) との論争⁶⁾ 以来、観光客はまがいもので満足するのか否か、「ほんものらしさ」をいかに提供するかなど、さらに劇場化された「演出された真正性」 (staged authenticity) の是非等、多種多様な「真正性」のあり方が主に社会学的視点から盛んに議論されてきた⁷⁾。

筆者はこうした「真正性」論争にあえて介入する意図はなく、従前から日本社会の土壤が有する「真正性」でない、「非真正性」なものを受容し、享受し、独自の文化的構造の中に組み込んできた数々の伝統の一端を明らかにしたいと考える。端的な例を示すと盆栽 (英語でもBONSAI) という自然の景観に似せた「ミニチュア文化」が存在する。様々な技巧をこらし、深山に自生する大木の勇姿を手間暇をかけて身近で縮小再現するものを、「真正

正性 (『ヴェニス憲章』の修理や改造は現状有姿のまま保存する) に近い。

4) 佐藤信編『世界遺産と歴史学』平成17年、山川出版社、p12以下。

5) Trilling, Lionel (1972), *Sincerity and Authenticity*, Cambridge, MA: Harvard University Press Trilling (1972) (ライオネル・トリリング『＜誠実＞と＜ほんもの＞：近代自我の確立と崩壊』、法政大学出版局、平成元年)

6) MacCannell, Dean (1973), "Staged Authenticity: Arrangements of Social Space in Tourist Settings," *American Journal of Sociology*, Vol.79, No.3, pp.589-603.

7) 佐々木土師二『旅行者行動の心理学』、関西大学出版部、平成12年、田中祥司「真正性の評価過程」平成25年 (https://dspace.wul.waseda.ac.jp/ShogakuKenkyuka/Kiyo_77_Tanaka.) など。

性」を欠く単なる「ニセモノ」の老人趣味と一刀両断に切り捨てるべきかどうかである。おそらく大自然を愛好しつつも遠くまで観光する機会に恵まれず、さりとて大名のように広大な庭園に本物の樹木を移植する経済力もスペースもなかった江戸期の庶民が深山幽谷に自生する大木の姿を想起して、居ながらにして観光する気分を楽しむ、一種の「旅の疑似体験」⁸⁾を志向した結果ではなかろうか。盆栽にも見られる「市中の山居」などの「真正性」を欠く虚構は日本文化の他のジャンルでも随所に見られ、同時に我国の観光の歴史にも色濃く反映しているように感じられる。

筆者としては西欧社会に依拠する「真正性」の議論とは別の視点から、観光学、とりわけ批判的精神を尊ぶ観光社会学領域で、観光における「真正性」というよりも、むしろ観光における「虚構性」の論議を創始したいと念じている。

II 我国を代表する観光現象と「真正性」

伊勢参宮が我国を代表する伝統的な観光現象であり、伊勢御師等の多彩な活動等が我国の観光業者の端緒であることも異論はなかろう。しかし「真正性」の視点からは大きな問題がある。昨年の平成26年の式年遷宮で「本物」を壊し、その部

材を一切再利用せず、「社殿をはじめとして御神宝、装束などの一切を作り替え」て全面リフレッシュしたお伊勢さんは観光資源として桁外れの存在であるが、「常若」⁹⁾思想に準拠する式年遷宮のお伊勢さんが仮に世界文化遺産に登録しようと考えた場合には修復の際にオリジナルな材料と確実な資料を尊重するとの「ヴェニス憲章」に全面的に抵触する。市民の投稿に関する伊勢市観光企画課の2010年8月の回答は以下の通りである。「神宮司庁へ意向を確認しましたところ、遷宮により20年に一度社殿を建て替える行為が、保護を目的とする世界遺産の趣旨にはそぐわないという理由で、登録申請することは難しい旨回答をいただきました。御存知のように、伊勢神宮は20年に一度社殿をはじめとして御神宝、装束などの一切を作り替えることにより、常に若々しく美しい姿を私達に見せてくれます。また、技術伝承という意味合いでの20年毎という意義についても伊勢の文化であると考えます。』¹⁰⁾

この憲章のいうようにお伊勢さんは俄かづくりの「ニセモノ」であろうか。壊された方の「本物」も実は20年前に同様な式年遷宮を経た「ニセモノ」となる。さすれば日本人は千何百年にわたって延々と「ニセモノ」詣でを続けてきたのか。「伊勢詣」「伊勢御師」など、日本の観光分野の由緒正しい出発点を「真正性」の議論だけから判定すれば、すべて

8) 庶民とは隔絶した地位にあったご三家・大名でさえも自邸に近江八景等を模した庭園を築き、同様に「旅の疑似体験」を楽しんだ。世界のディズニーランドの中で東京での物販収入が群を抜いているのは江戸期以来の日本の「土産物」文化の反映とされるが、戦前期の観光地絵葉書の流行と同様に日本人が享受してきた「旅の疑似体験」を何がしか隣近所にも分与する意味合いもあろう。(鈴木勇一郎『おみやげと鉄道』講談社、平成25年、p19参照)

9) 式年遷宮のお伊勢さんは常に新しくあり、永遠に減じないとの「常若」の思想で成立している。京都には「洗い屋」と呼ばれる木造建築・木工製品専門のクリーニング業者が存在する。老舗業者の宣伝文句には「新築の数寄屋建築のお茶室は、更に雅な仕上がりとなり、年数経過した建築物は従来の姿を取り戻し、更に生きながらえることができる」(京の匠

京都の伝統の技をかたちに 洗い屋www.miyako-life.com/arai.html)とある。お施主さんを大切に思う「洗い屋」は、神社のご依頼には新築同然の「ピカピカ」に仕上げるが、お寺さんのご依頼には匠の技で経年変化の侘び・さびを消さぬように手間暇をかけて、古くなって味の出た古刹の雰囲気大事にするのがコツだそうである。京都の「洗い屋」の真正性はダブルスタンダードとなっていて、神社には文化庁基準で最も美しい創建当初の姿に復原する方針をとる一方、お寺には「ヴェニス憲章」の現状有姿を尊重している。京都の「洗い屋」稼業は民間の商売だから、お施主さんのご意向次第で二重基準でも一向に差し支えない。

10) 「伊勢神宮を世界遺産登録へ」2010年7月受付(公開一覧/伊勢市www.city.ise.mie.jp/dd.aspx?moduleid=107618&category=kanko.)

「ニセモノ」の上に成り立つ「ニセモノ」の累乗ということになりかねず、おそらくこうした意味での「本物」「ニセモノ」の区別が一切ない「常若」思想は、そもそも欧米流の「真正性」の議論にはなじまないのではなかろうか。

一方、近年我国を代表する観光現象である有名テーマパークに関する関係者自身の記述にも、「真正性」を意味する「本物」の字句が目立つ。勤務経験を持つ芳中晃氏は「建物の外観はもちろん、目にするすべてが、まるで本物であるかのように作り込まれ…とてもつくりものとは思えないほどのリアリティあふれるものばかり¹¹⁾と「本物志向」を強調する。その証拠にオリエンタルランドの高橋政知第二代社長は着工時に「とにかく本物を創ってほしい。ハリボテまがいのものでは絶対にダメだ¹²⁾と訓示し、日本へパークを移植した当人であるマーティ・スクラーも「一九八〇年代の日本人は、品質やブランドに敏感になり、オリジナルを見分ける力もついてきた。彼らは『本物』を求めている¹³⁾と回顧している。

遠い将来に「真正なるアメリカの伝統」を代表するものとして、1955年開業のアナハイムのパークの世界文化遺産登録問題が浮上した場合を想定してみよう。「常若」思想ではないのであろうが、当園も創設者の永遠に完成しないとの哲学に基づき絶えず追加投資をしつづけ、創建当初の姿をと

どめていないため、お伊勢さんと同様な問題が生じるかもしれない。

Ⅲ 「真正性」を構成する要素

「真正性」はオリジナル、リアルといった別の語句で説明されることが多いが、なかなか判然とし難い概念であり、長年の論争に決着がつかない。たとえば我国でも佐々木土師二氏は真正性の尺度について「昔のまま」、「人為的加工がない」、「装飾的でない」、「近づきやすい」というような意味で、「演出的でない」という特徴に集約しようと試みた¹⁴⁾。こうした真正性を構成する要素に関する先行研究¹⁵⁾を踏まえて、一般的に「真正性」を担保する要素と考えられるものを、真贋の議論を参考に筆者なりに再構築・整理すれば順不同だが、①合法性(適法性)、②実在性¹⁶⁾、③独創性(自律性)、④正統性(legitimacy)¹⁷⁾、⑤純粋性(無添加性、非演出性)、⑥非遊戯性、⑦希少性(唯一絶対)、⑧高品質性・良質性(純正)、⑨誠実性・規範性(無垢性)、⑩本格性、⑪高級性・高コスト性¹⁸⁾、⑫完全再現性¹⁹⁾、⑬優位性、⑭天然性(自然)、⑮当然ながら同義語としての唯一無二のオリジナル性などである。

逆に虚偽性を構成する要素と考えられるのは、同じく順不同に、①非合法性(違法性)、②架空

11) 芳中晃『ディズニーランドはなぜお客様の心をつかんで離さないのか』中経出版、平成21年、p90

12) 『オリエンタルランド50年史』平成25年、p72

13) マーティ・スクラー著、矢羽野薫訳『ディズニー 夢の王国をつくる』河出書房新社、平成26年、p234

14) 佐々木土師二『旅行者行動の心理学』、関西大学出版部、平成12年、p247

15) 西野嘉章編『真贋のはざま デュシャンから遺伝子まで』東京大学総合研究博物館、平成13年。この中で西野氏は「コピー／オリジナルという伝統的な二項対立図式…の虚構性を暴いてみせる」(緒言)とする。

16) 実在性もリアル、在地性、地産性など所在する地域コミュニティとの不可分の関係性などを含む。

17) 正統性そのものも継承性、有資格性、有効性、神聖、元祖等の意味を含む多義的概念である。

18) 「ディズニーの本物志向は…つくりものを使用せず、時間とコストをかけて集めた本物を使用している」(芳中前掲書年、p92)

19) 「『非日常的な世界』を完全に再現するため」(芳中前掲書、p118)「ディズニーの本物志向、ものつくりへのこだわり、細部の忠実な再現」(芳中前掲書、p95)

性²⁰⁾、③模倣性(準拠性、随伴性)、④非正統性(無資格性、亜流、傍流)、⑤演出性(不純性、添加性)、⑥遊戯性(観光目的)、⑦豊富(大量生産)性、⑧粗悪性、⑨不誠実性・作爲性(意図的な悪意性、詐欺性)、⑩未熟性、⑪安価性²¹⁾、⑫縮小性(ミニチュア、手抜き²²⁾)、⑬劣後性、⑭人爲性・人工性(人造²³⁾、養殖)、⑮当然ながら同義語としての疑似性・複製(コピー、写真、印刷)などである。

以下、「真正性」の論議にこのような基準を仮に設けたとしても、真贋の判定は容易ではないことを例示しておきたい。そもそもオリジナルは唯一無二との先入観があるが、美術界でも版画やリトグラフ(lithographe)、エッチング(etching)の類はナンバリングされた何枚もの複製品がオリジナルとして通用している。また学校や美術館等では教育や啓蒙のための多くのレプリカという名の「ニセモノ」が合法的に所蔵され、『「コピー」でしか成り立ち得ぬ事柄や行為』²⁴⁾が多く存在する。また国家や発券機関が発行する紙幣も単なる印刷物にすぎないが、リトグラフ以上に厳格に品質、枚数管理され番号が打刻されたものが本物として通用している。近年ネット上では「本人」と「ニセモノ」の区別が難しく、オリジナルとコピーとの峻別も無意味になりつつある。

違法行為となる「ニセ札」偽造は論外としても、合法的な複製品のほかにも、「ニセモノ」としての程度が軽微で、黙認ないし堂々と露出できるものに「模造」、「模型」、「模擬」といった中間領域の類語群が存在する。

(1)「模造」

食品などでニセモノを意味する接尾語に「そのものにそっくり」の意の「もどき(擬き)」がある。たとえば京都で「ひろうす」と呼ぶ揚げ豆腐の変形商品は関東では「がんもどき」と呼ばれる。同様なニセモノにカニ風味の「カニカマ」などがあるが、あくまで高価なカニの廉価な代用品であり、万一にも冬の北陸の老舗旅館で観光客に供されたりすると「食品偽装」と騒がれよう。一方「がんもどき」も「本物」のカモ肉のニセモノであるが、わざわざ本場の永平寺あたりで、名物精進料理の一品として観光客がじっくりと賞味した場合を仮定すれば「本物」の肉が入っていないと苦情をいう人はいない。「がんもどき」が「本物」そっくりに出来ていると感心する人も少い。むしろ、僧侶から精進料理の由緒を聞き、そこにオリジナルとは異なる独自の世界が繰り広げられてきた史実そのものに大いに納得するに違いない。「もどき」料理の発祥は禅宗の曹洞宗開祖・道元が中国・宋から持ち帰りわが国で確立した「精進料理」といわれ、戒律で禁止された肉の代替品として、多くの「本物」に似せた「ニセモノ」料理が庫院の責任者「典座(てんぞ)」達により次々と考案され、現代に継承されて喜んで賞味されている。

(2)「模型」

個人が自宅で楽しむ鉄道模型など、観光とは一見無縁のようにも見えるが、根っからの鉄道愛好者だったW. ディズニーがディズニーランド創設しようと妄想した段階では、ほとんど大型の模型鉄

20) 換言すれば非実在性、非在地性など所在する地域コミュニティとの絶縁性等を意味する。所在する地域コミュニティとの絶縁性に関しては拙著『観光デザインとコミュニティデザインー地域融合型観光ビジネスモデルの創造者“観光デザイナー”ー』(日本経済評論社、平成26年)参照。

21) 中国では「本物とニセモノを区別する唯一の手段は『値段が高いか安いかわかるのだそうだが…カモフラージュのために、わざと値段を本物に近く設定している』(青樹明子『日中ビジネス摩擦』平成15年、p141)こともあるという。

22) 三橋俊雄氏は建替えられた旧三井銀行京都支店を「カサブタ保存」、旧第一勧業銀行京都支店を「レプリカ保存」として不完全な保存「建築として、そして、景観としての真正性(authenticity)が問われる」(『京都における景観のAuthenticity』『日本デザイン学会研究発表大会概要集』平成18年、jlc.jst.go.jp)と指摘した。また「失敗したテーマパークを手がけた企業は、ことごとくソフトの構築段階で手を抜きました」(芳前掲書、p59)とされる。

道を走らせようとの単純な動機からではなかったかと同好者には映る。また筆者が鉄道を愛好するに至った契機も裕福な友人の邸宅に鎮座していた高嶺の花たるHOゲージを羨望のまなざしで見つめつつも、W. ディズニーの場合とは異なり「ニセモノ」鉄道をわが物とする夢を容易には果たせなかったという屈折した幼児期の思いに由来する。

(3)「模擬」

虚偽の類似語として、やや軽度の語感を伴う「模擬」という用語がある。模擬は本物をまねて同じように作ったり行ったりすることをいい、例えば模擬店は宴会・学園祭・運動会などで実際の店をまねて臨時に設ける簡単な飲食店をいう。この場合、真正性を有する正規店舗と、虚偽性を構成する模擬店との外形的判別は極めて容易ではあるが、利用客の得られる効用に関しては相対的に高級な位置付けにあるはずの正規店舗が常に高く、低級と見做される模擬店の方が低いとは限らない。仮に同一メニューが同一素材、同一価格で提供されたと仮定しても、学園祭の独特の雰囲気の中で飲食した思い出の方が正規店舗の場合よりも良好であった経験も少なくないと思われる。

「本物」「ニセモノ」は所詮法律問題だから、グレーな中間領域を含めてすべて裁判で黑白をつければよい話と短絡的に考える向きもあろう。たしかに通貨と「紛らわしい外観を有するもの」を作った場合に適用される「通貨及証券模造取締法」で「誰が見ても本物でない」モノ(無罪)と「誰が見て

も本物に見える」モノ(有罪)との中間だった場合は個々の裁判でどう判断されるか微妙なものがあると解釈されている。一般論としては日本銀行が正規に発行した日本銀行券が本物であり、悪意者が非合法に贋作したものは、素人の目では一見本物と見分けがつかないほど精巧な偽札でも虚偽ということになる。しかし明治10年の西南戦争の際に、西郷軍が発行した見た目にも安っぽい「西郷札」が単純に「ニセモノ」かどうかとなると議論があろう。もし勝ち目の少なかった革命勢力側が戦争で逆転勝利すれば、明治維新政府側で発行した当時の国立銀行券に代って「西郷札」が本物の紙幣として流通する可能性も僅かながらも存在したからである。従って発行紙幣の真贋と政権の正統性の有無は表裏一体の関係にある。

通貨に対する信用、すなわち通貨の真正に対する公共の信用が一度失われると、国家の信用そのものを揺るがし、その真贋が判定できぬことを理由として通貨の受け取りを拒否する輩を生むなど通貨の円滑な流通を阻害し経済活動にも大きな支障が生ずる恐れがあることから、通貨偽造罪は国家の信用そのものに関わるような重大な犯罪と位置づけられる。各国の法制で通貨偽造の罪を金額の多少に関わらず、たとえ遊び心で紙幣のカラーコピーを一枚作っただけでも、意外なほど厳罰に処する所以は通貨の混乱がひいてはその国の信用そのものを揺るがし、西郷さんの挙兵と同様に時の政権の正統性をも揺るがし兼ねない“国家転覆罪”を形成すると考える政権側の論理に基づくからである²⁵⁾。

23) 虚偽性の要因のうち、とりわけ「人工」「人造」という語句にいいしれぬ劣等性を掻き立てられるのはズルチン・サッカリンなどの「人工甘味料」、バターとは程遠い「人造バター」なる代物に苦い思い出を有する旧世代である。純正牛乳から純良バターを抜き取った後の廃物利用かと疑う「脱脂粉乳」などとともに粗悪給食のお世話になった旧人類には周囲にあふれ過ぎていた「人工」「人造」という「ニセモノ」接頭語には過敏に反応する。彼らの容易に到達できなかった彼岸には、「純正」「純良」などの「本物」をことさらに強調した接頭語が

あふれたアメリカのような生活を夢見る世界が存在した。

24) 前掲西野編。緒言。

25) 佐伯仁志「通貨偽造罪の研究」『日本銀行金融研究所リサーチペーパー』(www.imes.boj.or.jp/research/papers/japanese/kk23-h-2.pdf)。

極論すれば「単なる紙切れ」にすぎないものを価値ある「本物」と信じ込ませている国家当局の情報操作という国家信用そのものの、意外に脆い「堤」を壊そうとする不屈き者は、たとえ「蟻の穴」一つであったとしても見せしめとして「国事犯」並みに厳しく処刑する必要があるからであろう。

種々議論してきた「本物」「ニセモノ」も所詮は歴史的所産であり、時代と共に内容も当然に変化する。筆者よりも上の旧世代には「本物」＝舶来、高価、入手困難という高級イメージ、「人造」＝(残念ながら当時の)国産、廉価、粗悪という低級イメージが染み付いて取れないのではなかろうか。しかし、「本物」の白米から「銀シャリ」なる贅辞が消えて、時の首相から「貧乏人は(我慢して安い)麦を食え」といわれた「ニセモノ」のはずの麦飯の方が健康志向の今日では評価が上がるなど、「本物」と「ニセモノ」の上下関係も時とともに変化する相対的なものにすぎない。戦前期から人造絹糸などと呼ばれた「ニセモノ」のはずの合成繊維は格段の進化を遂げて、いつしか「本物」のシルクを駆逐、富岡製糸場を世界遺産に押し上げた。御木本幸吉の養殖真珠また然り。人造人間が本物の棋士を真剣勝負で負かしつつあるご時世、天然物と養殖物との間の圧倒的な価格差も縮小、やがて逆転する日も来るかもしれない。

IV 観光における品質保証

—真正性と虚偽性の背景

こうした本物とニセモノとの間に介在する、解決が容易ではない諸課題を参考に、本題の観光における真正性(authenticity)と虚偽性の議論に入ろう。そもそも観光という特殊な商品の品質や効用

は概ね計測困難であり、定量的に評価できる部分が少ない。団体旅行中心の一時期は旅館・ホテルの近代化・大型化がよとされ、客室数や建物の階数を誇示する風潮もみられたが、眺望の点を別にすれば高層・超大型建築が必ずしも観光客の満足を保証するものではないことは明らかである。このように遠隔地に居住する観光客に事前に正確に品質情報、ましてや結果としての顧客満足度を伝達することはなかなか困難である。今日のようにネットで動画が容易に発信できる環境がなかった時代には案内書、ポスター、パンフレット、新聞雑誌等の文字中心の広告、口コミ等の限られたスペースで僅かな情報量を伝達するしか手段や方法がなかったであろう。

その際に観光客が享受するであろう顧客満足度を事前にある程度保証するには、権威ある公的な機関等の「お墨付き」か、既に一流の観光資源であるとの定評があるブランド名等を拝借するしか能がない。前者がユネスコによる世界遺産登録、政府による国立公園等といった認定諸制度であり、後者が本書の主要課題である「本物」を擬した各種の「ニセモノ」群の古くからみられる横行である。

この中間的存在に個人や任意機関等による「グループ」化ともいうべき、「勝手格付け」行為がある。すなわち、「この観光資源は、×××と△△△とともに『日本三大○○○』の一つと呼ばれております」といった宣伝文句の類である。○○○の中には観光資源のジャンルが、×××と△△△の中には、当該ジャンルの中で超一流と見做されている「本物」の名前がはいるが、大抵の場合どのような権威ある機関が認定したのかという主語は省略されることが多い。この宣伝文句を聞いた観光客の側にすると、挙げられた地名等は既知である場合

が多いため、「本物」と同一ランクにある品質が権威ある機関によって認定したのだろうか…と勝手に思い込むという仕掛けである。このトリックの化けの皮が剥がれるのは、別の地域を訪れたときに、やはり同一の「日本三大〇〇〇」の名前を聞かされた時である。後の二つは不動の位置にあるのに、もう一つはいわば空欄扱いで、ご当地の方で勝手に挿入自由なシステムになっていることに気付くからである。空欄のある「日本三大〇〇〇」は極端な例としても、権威ある先達などが指南書や案内記等の中で「霊地・名勝等を三、八、三十三、八十八、百といった縁起の良い数だけを選定する格付け、ランキング行為が近世以降に流行した。たとえば人口に膾炙している「日本三景」は江戸時代前期の儒学者・林春斎が、寛永20年に『日本国事跡考』の中で海浜リゾート地として言及したのが初出とされる。「日本三景」の場合は空欄がなく、固定化しているが、その順序はご当地ごとにランキングが異なって、ご当地が優先されているのはご愛嬌である。

V 本物とニセモノとの間の中間領域

「真正性」と「非真正性」との間には、正とも邪ともつかぬ中間領域が種々存在し、日本人は以下に述べるように、この中間領域を活用した様々な文化・芸術活動を展開してきた。とりわけ観光現象と密接な関係を有する事象をいくつか紹介しておきたい。

(1) 物語の世界での虚構性（神話、昔話、伝説、伝承等）

本物とニセモノの間には「真正性」といった価

値基準には馴染み難い神話、昔話、伝説、伝承といった真偽の判じ難い古くからの世界があり、近年「都市伝説」なるものも加わって来ている。日本各地、特に人里離れた山間僻地には「平家の落人」「義経伝説」「業平伝説」など数多くの「貴種流離譚」の系譜に連なる伝説が存在し、湯西川、祖谷、椎葉等の秘境の貴重な観光資源ともなっている。旅の俳人・松尾芭蕉の幕府隠密説などという異説もあり、本当に『おくのほそ道』六百里の旅程を45歳の芭蕉が山谷跋涉してきたのかを検証しようと徒歩での調査を志す御仁もいる。

伝説の類を非科学的なりとして十把ひとからげに虚偽説として葬り去る者が多い中、これら概して不遇のヒーロー・ヒロインに同情する「判官最良」もあって、後年に脚色された信憑性に薄い伝承を信じて現地を訪れる数寄者もあとをたたない。重大な関心を持った水戸光圀などは『大日本史』編纂の一環として義経北行説の真偽を確かめるため快風丸を建造し数回に亘って蝦夷に探検隊を派遣するなど、幻の「義経伝説」に執着したほどである。西欧でも幻のトロイア伝説を発掘調査費を自弁してまで実在を証明した数寄者シュリーマンの例もある。

(2) 「ニセモノ」の社寺乱造を正当化する「勸請」制度

勸請とは神仏の霊を分けて、別の所に移し祭ることで、神仏の霊のおいでを願うことをいう。霊験あらたかな京都の伏見稲荷、宇佐八幡、富士の浅間神社など各神社の御神体を各地に分祀した結果、全国の神社には何派かの有力系統が形成されている。この結果、ご近所の小さな「お稲荷さん」も決して「ニセモノ」というわけではなく、繰り返し

“細胞分裂”を続けて来た源を糺せばれっきとした京都の伏見稲荷の系譜に繋がる「本物」であるとして信用されることになる。本山と末寺という本末制度などと同様に、「真正性」を欠くコピーなどではなく、霊験あらたかな神仏の正統性を保証する、一種の「フランチャイズ・システム」とも解される。こうした「勧請」「本末制度」なども、京都のご本山などへ遠路巡礼することなく、「旅の疑似体験」たるご近所のミニチュア版である程度我慢する日本人の特性かもしれない。

(3) 茶道での虚構性

虚偽性を構成する要因を多重的、重層的に配合することによって、ニセモノの「本物らしさ」を向上させる努力が払われる。たとえば千利休は日常空間と明確に仕切られた茶室の出入口に躡り口（にじり口）という一種の結界を設けることで、全く別の非日常空間であることを意識させることに成功したといわれる。また利休は「市中の山居」という虚構を構想して、現実には市中にありながらも、あたかも深山の静寂の中に遊ぶかのような気分させるための茶室や周辺のしつらえに創意と工夫を凝らした。オリエンタルランドの前社長の福島祥郎氏によればパークの入り口も「茶道で茶室に入る『にじり口』と同じで…入り口からゲストを日常から解き放つ魔法にかける」²⁶⁾「トンネル」だと解して、「パークには和の心があふれています」²⁷⁾と「和魂洋才」²⁸⁾ぶりを発揮している。

(4) 伝統文化での虚構性

和歌や俳諧、浮世絵等の伝統文化の世界では古くから「本歌取り」「見立て」等と呼ばれる本物を超越した知的な遊びの技法が伝わっている。歴史

的、伝統的な正統な部分をそのまま表現せずに、ある種の類似性を保持しつつも、時代、概念、視点などを移し替えて、全く別のものになぞらえて表現して楽しむ一種のオマージュである。いわば、本物を本物として単純に楽しむだけではなく、表現者側の自由な空想力にまかせて幾通りものバリエーションという名前のニセモノを次々に創作して楽しむという一種の言葉遊び、知的遊戯とでもいえるか。こうしたニセモノ技法は戯作文学、歌舞伎、落語、ミステリーなど日本の様々な芸術分野でも用いられ、その価値を高めている。風刺的な色彩が強くなると西洋のパロディにも近づくかもしれない。同様に日本庭園の世界でも「見立て」技法が用いられる。例えば龍安寺石庭の枯山水は白砂や小石の文様が「水の流れ」に見立てられる。同じく水戸徳川家二代藩主光圀が將軍家光の助言も得て作庭した小石川後樂園の大泉水は実在の琵琶湖を巧みに表現し、西端岬の巨松を唐崎の松と呼び、島を琵琶湖に浮かぶ竹生島に見立てるなどである。さらに園内を流れる川を京都嵐山に沿った大堰川に見立て、架かる土橋を渡月橋と呼ぶなど、家光や光圀ら江戸期の支配層が中国の名勝と並んで京都や近江八景にも憧れていた様子がうかがえる。

(5) 「ニセモノ」を「本物」として愉しむ虚構

冒頭に述べた「ニセモノ」の「大木」をあたかも「本物」として慈しむ盆栽文化と同様に、数々の「ニセモノ」の中で「山」を「本物」として愉しむ虚構の例を具体的に挙げて見よう。①「山」の雰囲気を楽しむ「市中の山居」の虚構、②「山」の「ミニチュア」で愉しむ「市中の築山」の虚構、③「市中の築山」を観覧させる「見世物」の虚構（各地の人工富士）、

26)27) 平成21年4月17日(土) 日経夕刊①

28) 昭和59年4月4日読売⑥

29) 岩科小一郎編『東京の富士塚』昭和50年、山村民俗の会, p3

④「市中の築山」をあたかも「名山」の如く取り扱って愉しむ「市中の登山」の虚構（大阪築港の天保山）などである。時期や場所、主宰した人物や設置の動機は区々であるが、いずれも結果として「ニセモノ」を排除することなく、「ニセモノ」の効用をフルに活用している点で共通している。

ここでは富士山の盆栽版ともいえる富士塚の例を紹介しておく。関東地方を中心に広く分布する富士塚とは本物を模した小型の模型の富士山をいう。関東に広く分布する富士塚の元祖とされる高田富士を創設した植木職・藤四郎の意図は「富岳を模して、男女老少とも心安く登山するようとて築立せしもの」²⁹⁾とされ、大正2年大町桂月は「関東には富士講の連中多し。而も富士山は東京より近しとせず。日々参詣する訳には行かず。是に於て、東京には諸処に、富士山の小模型あり。品川神社、深川八幡、高田八幡、護国寺など一々数ふるに違あらず。重蔵の富士山もその一也」³⁰⁾と書いている

富士塚は富士信仰に基づいた富士講員らが富士山の溶岩を積み上げて富士山に模して造営された人工の山や塚で、頂上には浅間神社を祀り、富士山の山開きの7月1日に富士講員が白装束に講紋を染めた袈裟をかけ、「六根清浄」と唱え富士塚に登り富士山を遠望、近隣の七富士巡りをする習慣がある。大町桂月のいうように本物の「富士山は東京より近しとせず。日々参詣する訳には行かず」³¹⁾実際の登山に代る代替財として、地域社会の氏神の境内等を借用して、塚に登ることで富士登山を疑似的に体験する趣旨の「富士山の小模型」（ミニチュア）としてのニセモノを築造していった。築造する過程において、村人を代表して富士講員が富士山に上り、現在では違法行為であるが、「峨々たる岩肌を再現するために」³²⁾黒い溶岩

の断片を輸送するなど相当の手間隙と費用をかけて完成させたものであろう。完成後も富士登山の出発に際して地元の富士塚に登って安全を祈願し、下山時も地元の富士塚に帰着、無事を感謝した。こうした富士信仰や富士への畏敬の念に支えられて築造され、活用され、大事に保存されてきた多種多様なニセモノの富士山の存在は決して本物の富士山と相対立する、相並び立たぬ不倶戴天の敵というわけではない。むしろ本物の富士山に対する日々の敬慕・憧憬の念を増幅させる富士信仰の重要な「よすが」である。

富士講など富士信仰に基づかない見せ物・出し物としての「人造富士山」が浅草公園六区にあった。この浅草寺の境内で立派な模型の富士山を見て痛く感激した甲州出身の雨宮敬次郎は「俺も今にもっとでかい富士山を作って見せる」³³⁾と密かに決心、後年の明治39年9月22日自分の還暦祝の招宴の出し物、「余楽富士登山案内」³⁴⁾として東京九段の四千坪もの大邸宅の前に「一夜造りの不二の山峰」³⁵⁾なる「模造富士山」を築造した。富士山からの下山道には甲州特産の葡萄棚をしつらえ、自由に葡萄狩りをさせ、山麓の西側には富士の名勝・人穴を開け、その中は模擬茶店を並べた宴会場という徹底したニセモノづくめの趣向³⁶⁾であった。さすが甲武鉄道等を敷設した「鉄道王」雨宮敬次郎だけに掛けた費用は8万円、「その美観、さすがの豪華、翁が招待ぶりを発起」³⁷⁾、やることのスケールが大きいと大評判で「登山者の満足一方ならず」³⁸⁾、「庭園の一方に造りたる模造富士山にて高さ七十五尺、頂上に登れば東京中を一眸の下に瞰下ろすを得べく、甲州出身なる雨宮氏の意気と相対して頗る妙なりし」³⁹⁾と大きく報じられた。

30) 「近藤重蔵の富士山」『桂月全集 第二巻』大正15年、p130 所収

31) 「狭山紀行」『桂月全集 第二巻』大正15年、p75所収

32) 前掲東京の富士塚、p6

33)36) 小林和生『伝記 天下の雨敬』山梨企画、平成3年、p319

34)35)37)38) 明治39年10月23日国民新聞

39) 明治39年10月27日鉄道時報⑨

(6) 背景にある「旅の疑似体験」

ここで筆者はこうした「ニセモノ」を許容する社会的な背景の一つとして江戸期までに形成された「旅の疑似体験」という概念を提唱してみたい。上述した通り、遠方の京都、伊勢、富士山などの社寺・霊山等への本格的な観光が様々な制約から実現困難な時期にも、地域ぐるみの「勧請」で近隣に末社を誘致し、末寺を建て、富士塚を築いた。支配層は庭園を京都や近江の勝地に見立て、茶室で「市中の山居」の雰囲気浸った。庶民は朝晩に盆栽や草津等の霊泉園を眺めて深山の大木や本格的湯治を夢想した。いずれも本格的な「旅」の代用品として、日本人特有の省力・省資源・低コスト志向のお手軽な「見立て」であり、一種の虚構でもある。

幕末から明治初期にかけて存在したとされる「犬の伊勢参り」といった西欧の「真正性」基準からみれば荒唐無稽な作り話のように思えるものも、解明に取り組んだ仁科邦男氏によれば体力に自信のない人などが、犬が伊勢参宮してよいのなら、うちの犬を代参させようと送り出した史実であるとし、人々の善意につつまれた「犬の伊勢参りはなんとおおらかな話だろう」⁴⁰⁾と結んでいる。「旅の疑似体験」という思想が本人に代わって、なんと愛犬に代参させようという前代未聞の発想にまで到達したことに驚かざるを得ない。

その後の我国の観光施設としても本格的な温泉場での長逗留に代えて、近場に疑似温泉⁴¹⁾を設け、日帰り程度で満足した。明治大正期に欧米から導入した鉄道も狭軌鉄道で我慢し、さらに低コスト・低規格の人車鉄道⁴²⁾、軽便鉄道等で参詣・遊覧した。近郊に設けた遊園地なども高価な鉄道「旅の疑似体験」を家族に享受させる乗り物等を

設置したものであった。近年全国各地に出現した外国名を名乗る「〇〇村」でさえも、外国「旅の疑似体験」⁴³⁾を主な目的にしていた。温泉、鉄道、遊園等の虚構性の具体的検討は今後順次行う予定であるが、有名テーマパークで土産物をどっさり買い込む特異な風習も近隣に「旅の疑似体験」をお裾分けする趣旨であろう。有給休暇の消化率が低く、長期滞在型の観光旅行が未だに根付かぬ貧乏性の国民性の背景には、僅か数日程度の「旅の疑似体験」で満足する体質の故でもあろう。

VI | むすびにかえて

日常世界に実在する人々は不動の大地に根をおろし、大地に根付き、土地に生きる恒久的な「真」の生活者である。これに対して一時的に街道を通り過ぎるだけの「旅の人」は、風習や物の考え方を異にする「他国者」のニュアンスを色濃く含み、たとえ暫くの間滞在したとしても、やがて当地を立ち去るべき「虚」の臨時的滞在者・居留民のことである。

そもそも観光客は現実の日常世界からの離脱を志向して、在地性を自ら返上して当地を離れて他地域、他国を通過する人々で構成されている。現実の日常世界の中に実在する生活者・住民を「実」とすれば、観光客は非日常世界の水面を浮遊する泡沫であって、恒久的には存在しない「虚」的な存在ということになる。観光客は本来あるべき地域を一時的に遊離・逸脱し、在地性を自ら放棄した「無宿者」「遊芸の徒」的存在であるが故に、「真正性」を語り得るほどの改まった堅苦しい立場には置かれていない。「本物指向の観光客」という流行の字句があるが、一方で観光客は小説

40) 仁科邦男『犬の伊勢参り』平凡社、平成25年、p254

41) 疑似温泉は拙稿「明治期東京の“擬似温泉”の興亡—観光デザインの視点からビジネスモデルの変遷に着目して—」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』第3号 2013年3月参照。

42) 人車鉄道の発案は拙稿「雨宮敬次郎」小池滋・青木栄一・和久田康雄編『日本の鉄道をつくった人たち』第4章、悠書館、2010年6月、p92～11参照。

43) 一連の「外国村」ブームを外国人は「国内の観光客は自国を離れずして、楽しむことができる」(アラン・ブライマン『ディ

の中の主人公になったような感動を期待してストーリー性（物語性）を求めている。ストーリーには作り話、うその意味がある。当地を瞬間的に通過するに過ぎない「旅の人」は在地性がなく、「虚」的な存在としての非生活者であり、そもそも「真正性」を主張するだけの資格も、能力も具備していないのではなかろうか。

観光客一個人として考察しても、観光は「本物」でも「ニセモノ」でも楽しく興味を持てればよい。そもそも観光や休暇（vacation）の動機そのものが、「行方定めぬ」浮遊性、遊戯性、娯楽性、虚無性（vacancy）、逸脱性、反体制性等に起因しており、切実感に溢れ切迫した義務感のあるような実需性には乏しく、しばしば虚偽の情報に踊らされ、浮かれ出した「ええじゃないか」のごとき不和雷同性、騒乱・騒擾性をも伴う。こうした観光現象を規定する性向は、いずれも「真正性」とは親和性を欠いているものが多い。また庶民が奉公先から抜け出し、伊勢参りという大義名分のもとに実質的には今日の観光を享受した「御蔭参り」のように、普段の在所を離れ、ひとたび国境を越えて他国に入れば上司や知人の目もなく、諺にいう「旅の恥は掻き捨て」とばかり、思い切り開放感を求めたくなるのが観光の醍醐味でもあろう。当時の封建的な諸拘束を撥ね除けて「御蔭参り」を志願した江戸の庶民達も奉公先には「皇祖の地」への敬虔な信仰等を名目とした、もっともらしい「ニセモノ」の休暇願を提出したのだらうから、出発点からして「ニセモノ」の観光旅行である。道徳家のような小煩い人物からいちいち観光すべき「本物」であるとか、「ニセモノ」なるが故に観光すべきでないなどのご親切きわまるご託宣は無用と考える。

こうした意味での「虚」の「旅の人」である観光客にとってはまなざしをむける先の観光対象にとって「本物」「正解」は一つとは限らず多種多様に存在し、「本物」と「ニセモノ」の境界も狭く考えず、かなりの幅で許容範囲があると考えて、双方の間にも様々な中間形態の存在まで許容すべきであろう。もし、わが国の観光地からごく少数の「本物」の「真正性」を擁護するために伝説・伝承や、末寺、末社、「〇〇富士」「小京都」「〇〇の嵐山」の類や雪祭りの雪像までを永久追放すれば、観光資源の相当部分が損なわれ、滅失してしまう。むしろ「本物」より数が多く、全国どこにもありそうな「ニセモノ」「俄かに真贋判じ難きもの」の方に着目して、これを生かすことの方が「観光立国」には貢献しうるのである。正か邪か、単純な二者択一問題ではなく、現実（本物）ではない架空（ニセモノ）の世界を、そうと知った上で受け入れて、ニセモノの効用をも余裕をもって楽しむべきではなかろうか。真つ当な本物だけの純粋な世界が楽しいわけではなく、現実世界は多種多様な不純物が混入していて、本物とニセモノとが入り乱れ、どこまでが真実でどこからが虚偽なのかの境界も不明瞭で、虚と実とが混然一体となっているカオスのようなものであろう。

正か邪か、唯一絶対神しか信仰しない一神教ではなく、多種多様な神々を次々に並列的な存在として寛容に迎え入れてきた日本の多神教の風土に根付いた、融通無碍な和の世界では本物とニセモノとが相対立することなく、上述したように「見立て」「併存」「習合」などを介して双方が渾然一体となって止揚される結果、独自の美の世界⁴⁴⁾を構成していることが多い。西欧的な「真正性」論議からすれば、柔軟・臨機応変というよりも、いかにも無原則的な日和見主義に映ることであろうか…。

ズニー化する社会』明石書店、平成20年、p104）ものと観察した。

44)「洲浜」「山車」ひいては祇園祭の「山鉦」も神仙思想、山岳信仰等が融合した「模型」と解されている。（前掲西野編、p246）

要は「本物」だけが観光目的⁴⁵⁾だと決め付けて、一神教的「真正性」原理主義を採る結果、自己の判断によらず特定の権威者による“観光格付”⁴⁶⁾を絶対的な教義と考え、その上位ランクのみを機械的に自己の観光目的地とするような教条主義的立場は、むしろ自由な観光市場を拘束するものと考えるのが筆者の結論である。

45) 唯一絶対神の聖地への巡礼こそ観光なりと解する立場に立てば宗教的権威者等からの「真正性」なるお墨付きが尊重されよう。しかし「本物指向」でない江戸末期の我国では総本山仁和寺自身がミニ四国霊場巡りのお手軽コースを裏山に設けた。

46) たとえば増渕徹氏は『世界遺産は…『権威主義の権化』そのものであり…諸遺産の等級化…あるいは地域の文化的伝統の等級化』（増渕徹『文化財と世界遺産』前掲佐藤編，p58）をもたらし危険性を指摘する。

Study of Fictitiousness in Tourism

"Pseudo-Tourism" from a Tourism-Sociological Viewpoint

Isao Ogawa

The author broke down and examined several aspects of the Westernized concept of authenticity in tourism practices, a concept that essentially differs from Japan's traditional view. As far back as the Edo era, Japanese tourists have preferred trips that require less labor, fewer resources and lower cost, even though such trips are far from an authentic experience. The fundamental principle of pseudo-travel underlying this trend is characterized by a fictitiousness that is completely contrary to authenticity. In times when various constraints made it impossible to visit distant, sacred places, including temples and shrines in Kyoto and Ise as well as Mount Fuji, community groups invited the branches of those temples and shrines and erected miniature Mount Fujis in their towns. The ruling classes created gardens that replicated scenic sites in Kyoto and Omi Province, so they could look out and feel as if in a mountain hut in the city while enjoying a tea ceremony. Common folk contemplated their Bonsai trees and imagined massive trees deep in the mountains. And people who for health reasons were unable to make the pilgrimage to the Ise Grand Shrine sent their dogs instead. All of these people gave up journeying to faraway places and settled for shorter, less expensive trips to closer destinations.

Amid this trend, neighborhood quasi-hot spring spas were built so that people did not have to travel over a long distance to authentic hot spring facilities and stay for days. With the advent of rail transportation, introduced from the West to Japan during the Meiji and Taisho eras, the country made do with narrow gauge railways, and unwillingly people used human-powered trains and light railways that were cheaper with lower specifications to visit temples, shrines and other tourist sites. Nearby amusement parks featured rides that imitated expensive rail travel to give families a taste. Lately, theme parks recreating the sense of visiting a foreign country have cropped up throughout Japan, providing people with opportunities to experience a pseudo-trip abroad. Interestingly enough, visitors in the big theme parks buy a lot of souvenirs to share their experience with their neighbors. Not knowing how to relax, Japanese workers do not use their paid holidays in full, nor have the custom of going on long trips. This is probably why Japanese people are easily satisfied with very short trips. Thus it is questionable to conduct a historical analysis of Japanese tourism based solely on the Western concept of authenticity that significantly differs from that of Japan.